

小選挙区制と議員活動について

——アメリカ連邦下院選挙の事例から——

森
脇
俊
雅

一 はじめに

二 小選挙区制と議員

三 アメリカ連邦下院選挙の事例

——ニューヨーク州第三〇連邦下院選挙区を中心に——

(一) 選挙区

(二) 一九八四年選挙

(三) 一九八六年選挙

(四) 一九八八年選挙

四 むすびにかえて

小選挙区制と議員活動について

二七五

一 は じ め に

選挙制度改革はこれまでしばしば提唱され、論議されてきたが、とりわけ小選挙区制の導入が大きなテーマとして取り上げられてきている。小選挙区制はよく議会政治のモデルとされるイギリスやアメリカにおいて採用されているものの、日本ではあまりなじみがなく、十分に理解されているとはいえない。日本では帝国議会当時の第一回から第六回までの衆議院議員選挙ならびに第十四・第十五回の衆議院議員選挙で小選挙区制は採用された経緯はあるが、一九二五年法より、つまり第十六回以降の衆議院議員選挙では中選挙区制を採用して今日に至っている（大選挙区制限連記制をとった戦後最初の第二十二回選挙を除く⁽¹⁾）。

小選挙区制導入のねらいとしてよく指摘されるのは次の点である。まず、小選挙区制を導入すると、二大政党制をもたらし、政権交代が可能になるとされる。かつてモリス・デュベルジェは「小選挙区単純多数代表法は二党制をもたらす」と論じ、それは今日「デュベルジェの法則」と呼ばれるが、選挙区制は政党の数を規定するというのである⁽²⁾。次に、小選挙区制においては、候補者は党を代表しており、したがって政党本位の選挙となり、現行の日本の中選挙区制における選挙で見られるような同一政党候補者間の競争はなくなるとされる。いわゆる派閥選挙の弊害が解消されるというのである。そして、政党本位の選挙になれば、候補者個人にかかる負担は少なくなり、カネのかからない選挙の実現を期待することができるとされる。

「デュベルジェの法則」はともかく、小選挙区制になれば政党本位の選挙になるとかカネのかからない選挙が実現できるとかについては議論の余地がある。政党の組織力や指導力、選挙運動の方法、政治資金の規制方法な

ども大きな要因であり、選挙区制だけでこれらの問題が一举に解決するとは考えにくいのである。

これらの問題が重要であることはいうまでもないが、筆者がここで問題としたいのは、小選挙区制においてはどのような議員が選ばれ、そしてどのような議員活動をするのかということである。この点についてはこれまであまり取り上げられず、論議されてこなかったように思われる。選挙制度は代表を選出する基本的なルールなのであり、あるルールのもとでどのような代表が選出されるかはきわめて重要である。本稿ではとくにアメリカ連邦下院議員選挙を事例としてこの問題を考察する。もちろん、上述の問題と同様にこの問題についても選挙区制以外の要因も考慮しなければならぬ。選挙区制以外の要因との関連を検討しつつ、考察を進めることにしたい。

二 小選挙区と議員

小選挙区制においてどのような選挙が行われ、どのような議員が選ばれ、そしてどのような議員活動がなされているのであろうか。

リチャード・フェノはアメリカ連邦下院議員選挙区における議員の活動スタイルを「ホームスタイル」と呼び、各選挙区の実情に応じて議員はそれぞれのホームスタイルを形成するとした。彼によれば、ホームスタイルは画一的ではない。全米四三五の選挙区はそれぞれに異なる。社会経済的要因、人種構成、宗教的・文化的背景、地理的要因等によりさまざまである。そうした選挙区の実情を認識し、選挙民の要望に応える活動スタイル―資源配分（時間、エネルギー、スタッフ）、自己主張、およびワシントンの活動報告―を確立することが選挙においてきわめて重要になるというのである。⁽³⁾

小選挙区制と議員活動について

論 説

二七八

また、ケイン、フェアジョン、フィオリナはアメリカとイギリスの下院議員比較調査を実施し、アメリカでは政党要因とか大統領要因よりは地元選挙民との関係、とりわけ候補者の人柄、活動、実績に基づく選挙民の支持（パーソナルボート）が重要になってきていると論じる。イギリスでは従来から政党の統制力が強く、政党要因が重視されてきた。つまり、同じ小選挙区制ではあるがイギリスは個々の候補者よりも政党本位で選挙民は投票してきたというのである。⁽⁴⁾しかし、ケイン、フェアジョン、フィオリナによれば、そのイギリスでも最近ではパーソナルボートが増大しつつあると指摘される。⁽⁵⁾

アメリカ連邦下院議員選挙の顕著な特徴は現職議員の再選率が高いことである。一九八〇年代の五回の選挙とも現職の再選率は九〇%を超えており、一九八六年と一九八八年の選挙では実に九八%にも達した。これは現職議員が選挙区になじみが深く、地元活動を通じて選挙民との間に堅い結びつきを形成しているからにほかならない。⁽⁶⁾

では、このような選挙区要因とかパーソナルボートの増大傾向は、議員活動にどのような特徴を与えているのであろうか。ケイン、フェアジョン、フィオリナによれば、パーソナルボートの増大は選挙での各議員の独立性を増大させるという。政党支持とか政党の政策ではなく議員と選挙民との結びつきが重要になるので、議員は政党の政策や方針に拘束されなくなる。このことは政党の規律や党幹部のリーダーシップの弱体化をもたらす。党議拘束も弱まることになる。⁽⁷⁾政権をめざす政党はいうまでもなく綱領とか基本政策を掲げている。しかし、各議員はそれに拘束されず、もっぱら選挙区の利益や選挙民へのサービスに力を注ぐ。かくして、選挙では全国的事柄とか政策ではなく、選挙区の利害が取り上げられることになる。

アメリカではことにこの傾向が強まるという。強固な権力分立制をとるアメリカでは、立法府と行政府がそれぞれ独立している。議員として当選回数を重ね、議会で活躍しても閣僚になれるわけではない。議院内閣制の場合、議員として頭角をあらわしていくと、次は閣僚とか党幹部そして首相という「出世」の道が開けている。しかし、アメリカの場合、それはない。アメリカでは議員としての「出世」の方向は、議会指導者になることである。だが、それとてもヒエラルヒー的秩序のトップに立つことにはならない。アメリカでは周知のように委員会制度が発達しており、委員会が強力な権限を持つ。議会自体が分権的なものである。議員たちは主要な委員会の指導者になることをめざす。委員会の実力者となることにより、法案の成否をにぎり、そして自己の選挙区に有利な法案を通過させようとする。このことはますます党議拘束とか党幹部からの独立を促進する。⁽⁸⁾

他方、議院内閣制が発達し、そして政党の統制力の強固なイギリスでは、これまではアメリカとは様相が異なっていた。同じ小選挙区制でも選挙においては政党要因が強く、選挙民は候補者個人というよりも政党に投票してきた。党幹部の指導力は強力であり、陣笠議員はこれに服従していた。政策や法案についても党幹部が決定権を持ち、陣笠議員はその指示に従っていた。陣笠議員は党幹部に忠誠を誓い、当選を重ね、そして幹部に登用されるのを持つ。彼らは閣僚から最終的には首相をめざすのである。⁽⁹⁾

だが、ケイン、フェアジョン、フィオリナはイギリスでも徐々にではあるがパーソナルポットが増大してきており、かつてのような政党中心の投票は少なくなりつつあるという。彼らによれば、このようにして小選挙区制における議会選挙では選挙区志向が強まり、候補者と選挙民の結びつきが重要になっている。そしてそのことが現職議員に有利になり、現職の再選率が高まると説明される。⁽¹⁰⁾

小選挙区制と議員活動について

論 説

二八〇

小選挙区制における選挙と議員活動については、このようにパーソナルポットや選挙区活動が強調されるのであるが、現実の選挙ではさまざまな要因が作用しており、それらを見無視することはできない。ことに政党の役割をどう考えたらよいのであろうか。政党の役割を否定しないしはきわめて低く評価することではよいのであろうか。

先述したように、イギリスではこれまで政党組織が強固にあり、党幹部の指導力は強力であった。ケイン、フェアジョン、フィオリナも指摘するように、イギリスでは選挙区活動は議員もさることながら党地方組織の活動家が担う。イギリスの議員はアメリカの議員と異なり、多数のスタッフをもたないので、党地方組織活動家の役割が大きいのである。⁽¹¹⁾

アメリカでも党の役割が強まっているという指摘がある。アメリカ政党は周知のように分権的であり、地方組織の独立性が強い。州党組織は郡党組織の連合体であり、全国党組織は州党組織の連合体であるといえる。とくに、これまで全国党組織は四年に一度の大統領選挙の候補者を決める全国大会のための組織といつてよく、議会選挙などは州や地方党組織の任務とされた。各党の連邦議会議員団も全国党組織からの独立性が高いといわれてきた。⁽¹²⁾しかし、近年になり全国党組織の強化が進められてきている。ことに一九七〇年代以降の政党支持率の低下や政治不信の増大傾向の中で、党改革が唱えられ、党組織の強化や民主的運営が求められた。すなわち、ボス支配の打破、少数派（女性、黒人など）の重視とともに全国党組織の指導力強化の努力がなされた。⁽¹³⁾強化された全国党組織は、連邦議会選挙での候補者選定とか選挙運動支援に大きな役割を果たすことになる。実際に、民主・共和両党とも連邦議会議員団内の選挙対策委員会は党全国委員会と密接に連携しつつ、候補者選定や選挙

運動支援（とくに重点候補への支援）を行っているのである。⁽¹⁴⁾

選挙資金の調達にさいしても政党の役割を軽視することはできない。長期にわたり全国規模で運動が展開される大統領選挙において巨額の資金が投入されることはよく知られているが、連邦議会選挙でもカネのかかる傾向は顕著になってきている。とりわけテレビを使ったキャンペーンの普及により、テレビコマーシャルの費用が増大してきている。もちろん、現職優位傾向から無風に近い選挙もかなりあり、費用の額は選挙区とか選挙の実態により異なる。しかし、全般的傾向として選挙費用の増大は明白である。例えば、一九七四年選挙では全候補者の平均支出額は五万三三八四ドルであったが、十四年後の一九八八年選挙では二七万三八一ドルへと約五倍に増大しているのである。この間の物価上昇を考慮にいれても急激な増大である。とくに、八〇年代にはいつてからの増大傾向が目立つ。⁽¹⁵⁾

選挙資金集めには主として二通りの方法がある。一つはいわゆるパーティの開催による資金集めであり、いま一つは献金である。連邦議会レベルでもパーティ開催は盛んであるが、献金の占める役割が大きい。その献金については、従来は個人献金が大半であったが、近年、企業とか団体の政治活動委員会（PAC）の献金が増大してきている。⁽¹⁶⁾一九七四年選挙では個人献金が全献金額の七九%を占め、これに対してPACからの献金は一七%にすぎなかった。ところが、PAC献金は年々増大し、十四年後の一九八八年選挙では個人献金の役割は五六%に減少し、他方、PAC献金は四〇%に増大しているのである。いまやいかにPACの支援を得るかが選挙資金獲得のうえでも、そして選挙戦を有利に進めるうえでもきわめて重要になってきているのである。⁽¹⁷⁾

PACにも地方的なものから全国的なものまで多様であるが、やはり全国的規模の団体とか有力企業からの支

援は強力である。そして無名の新人とか陣笠議員はこうしたPACの支援をどのように獲得するかが大きな課題となる。彼らとそうしたPACとの媒体となるのが全国党組織の幹部や全国的指導者である。つまり、全国党組織幹部や全国的指導者が候補者に有力PACを紹介したり、有力PACに推薦したりするのである。このことは選挙資金獲得のうえで政党との関係の重要性を示すものである。

小選挙区制において見落としてはならない重要な問題は選挙区再編成である。これは議員の選挙活動に大きな影響を及ぼす。アメリカでは十年ごとの国勢調査結果に基づき選挙区画再編成が実施される。定数四三五を変更せず人口規模を単位に厳密に議員数が各州に配分されるので、議員数の変動が生じた州では選挙区画の再編成が行われる。その結果、営々として築いた選挙民との結びつきが区域の変動により切断されるということが生じる。

選挙区再編成の規模は州により異なる。全般的傾向として、東北部と中西部で減少し、南部と太平洋岸で増加している。ちなみに、ニューヨーク州は一九六二年に四一議席であったが、一九七二年に三九議席、そして一九八二年に三四議席に減員されてきている。カリフォルニア州は反対に一九六二年に三八議席であったが、一九七二年に四三議席、そして一九八二年に四五議席に増員されてきている。⁽¹⁸⁾

選挙区画再編成は州で行われる。すなわち、州法で規定されるのであり、したがって州議会が大きな役割を果たす。州議会の動向が重要となる。ことに州議会の勢力分布がときに決定的な影響を及ぼすのである。議会で優位に立つ政党が自党に有利なように区画を決定しようとするからである。選挙区画をめぐる⁽¹⁹⁾はゲリマンダリングが悪名高いが、党利党略による区画再編成はいまだにアメリカ政治において残存しているのである。

アメリカの議会選挙や議員活動において確かにパーソナルポットや選挙区活動が重要になってきているが、前

述の政党組織、選挙資金調達、選挙区画再編成なども無視しえない影響を及ぼす。これらは州や全国レベルの政党に関わることであり、政党要因といってよいであろう。パーソナルポットや選挙区活動を選挙区要因とするならば、選挙区要因と政党要因は実際にはどのようにに関わりあっているのでしょうか。もちろん、両者は一致することもあるであろうが、ときに対立することもある。次に連邦下院選挙の事例を取り上げ、これらの要因が相互にどのように作用しているかを検討する。本稿では、とくにニューヨーク州西北部の第三〇連邦下院選挙区における一九八四年、八六年、八八年の三回の選挙戦の模様を事例として取り上げる。

三 アメリカ連邦下院選挙の事例

——ニューヨーク州第三〇連邦下院選挙区を中心に——

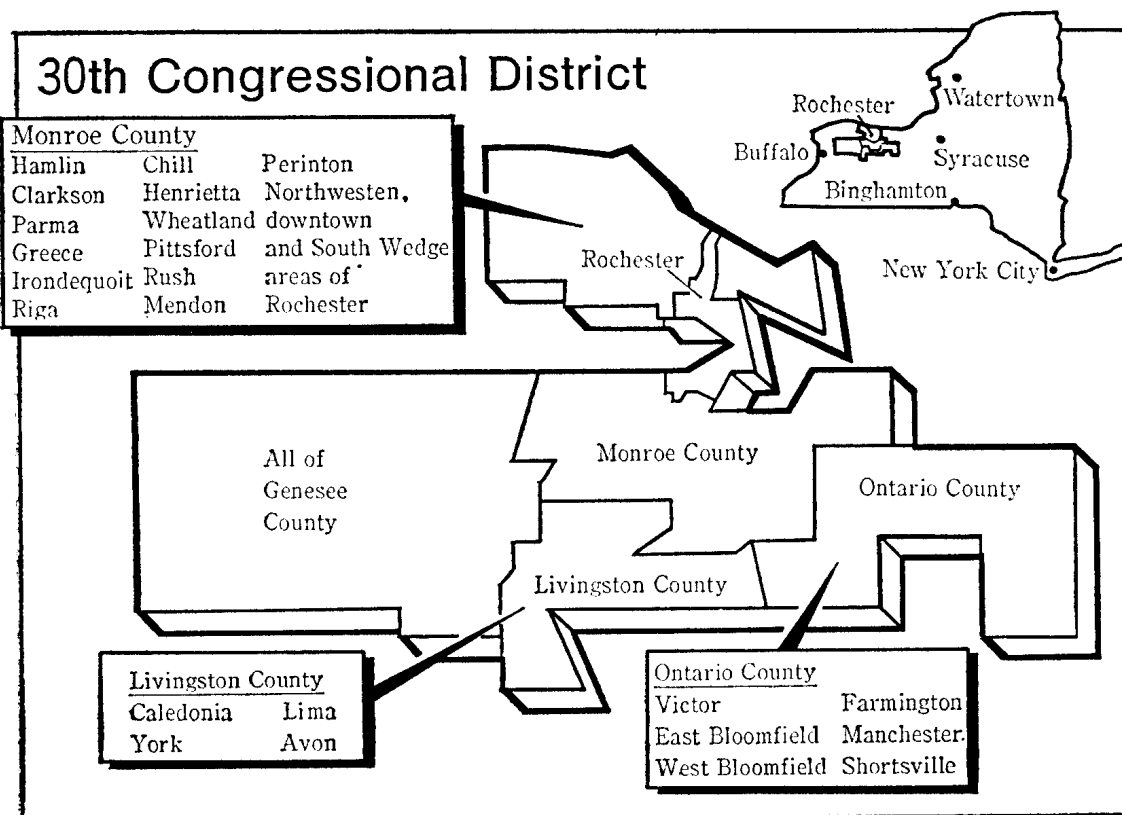
(一) 選挙区

ニューヨーク州第三〇連邦下院選挙区（以下、第三〇選挙区とする）は、ニューヨーク州西北部、オンタリオ湖南岸のモンロー郡（その一部）、ジェネシー郡、リビングストン郡（その一部）、およびオンタリオ郡（その一部）、から成る。なお、モンロー郡の他の地域は第二九、第三二選挙区に属し、リビングストン郡とオンタリオ郡の他の地域は第三一選挙区に属する。

第三〇選挙区の人口（一九八〇年国勢調査）は五万六八一九人で、うちモンロー郡が全体の八〇％を占め、つづいてジェネシー郡が十一％、オンタリオ郡が六％、そしてリビングストン郡が三％となっている。モンロー郡の動向が決定的となる選挙区である。ニューヨーク州には三十四の連邦下院選挙区があるが、第三〇選挙区は

小選挙区制と議員活動について

図1 ニューヨーク州第30連邦下院選挙区



論
説

二八四

平均年間所得で第八位、持家率で第十位、そして高校卒業未満の割合が低い方から四番目となっている。ニューヨーク州の中でも比較的豊かで教育程度の高い地域といえる。

第三〇選挙区は都市部と郡部から成り、都市部には州第三の都市ロチェスター市がある。ロチェスター市は人口約二三万五千人で、モンロー郡の中核都市である。コダック社の本社、ゼロックス社の主力工場があり、ハイテク産業都市として知られている。政治的には、ニューヨーク州の都市部がそうであるように、ロチェスター市では民主党が圧倒的に強い。市長、市議会全員が民主党である。ロチェスター市以外のモンロー郡はいわばロチェスター市の郊外を形成し、良好な住宅地域と農業地域である。全般に保守的で、伝統的に共和党が強い。例えば、ロチェスター市に隣接するグリース町（人口約九万人）はほぼ二対一の割合で共和党支持者が民主党支持者

表1 人口（1980年国勢調査）と政党登録支持者数（1988年予備選挙）

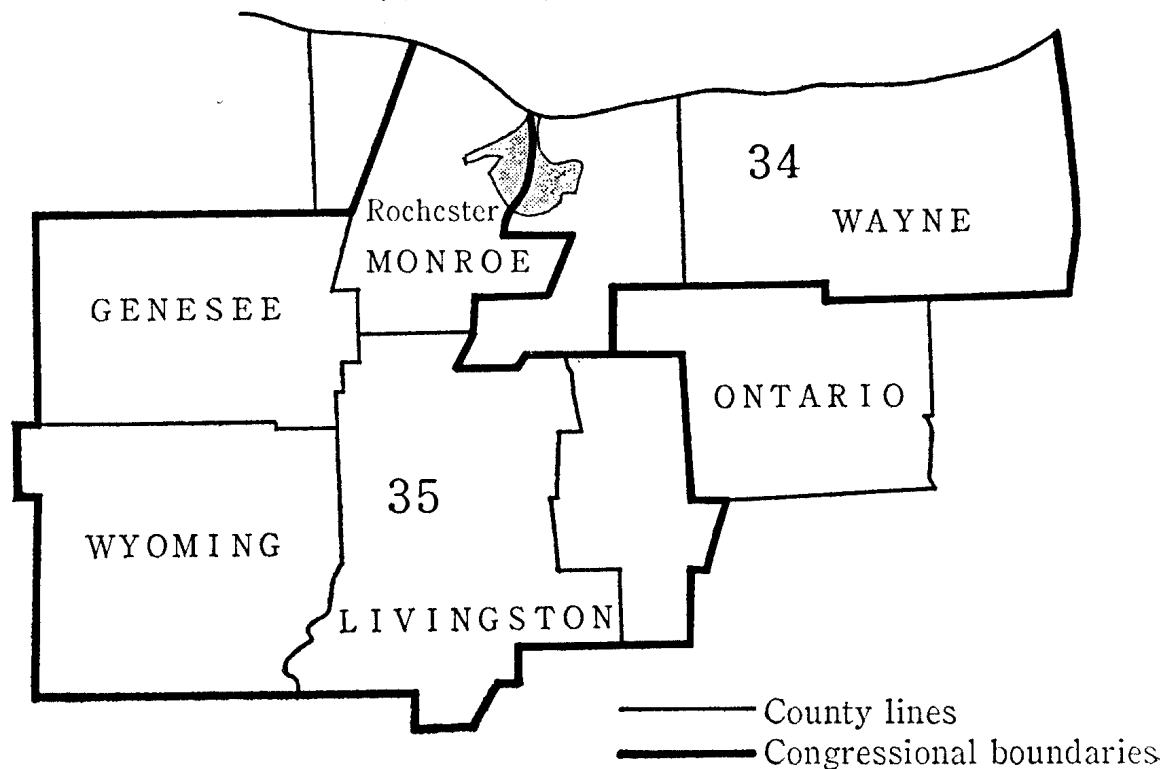
地 域	人 口	民主党登録者数	共和党登録者数
モンロー郡	702,238	108,445	139,281
ジェネシー郡	59,400	8,154	13,546
リビングストン郡	57,006	7,198	13,898
オンタリオ郡	88,909	12,840	20,861
ニューヨーク州	17,558,072	3,493,050	2,472,438

小選挙区制と議員活動について

を上回っている。モンロー郡全体としては共和党がやや優勢という状況である。ジェネシー、リビングストン、オンタリオ郡は典型的な農業地域であり、そしてニューヨーク州の郡部がそうであるように、共和党が圧倒的に強い。登録支持者数ではほぼ二対一の割合となっている。第三〇選挙区は全体として共和党が優勢な選挙区である。⁽²⁰⁾ところで図1からもうかがえるように、第三〇選挙区の形状は実に奇妙で不自然である。ロチェスター市が複雑に分断されているのである。第三〇選挙区のこのような形状は一九八〇年国勢調査による選挙区画再編成によってできたもので、州議会民主党と共和党の妥協の産物であった。先述したように、ニューヨーク州は人口減のため五議席が削減され、大幅な再編成をせまられていた。選挙区再編成を決定する州議会は下院で民主党、上院では共和党が多数を占めていた。両党の妥協がなければ再編成はならず、折衝の末、現状のような形になったのである。

もともとロチェスター市をめぐるでは党利党略的な区画づくりがなされている。図2は一九八〇年までの選挙区画であるが、ここでもロチェスター市は東西に分断されていた。これは州議会でも共和党が優勢であった頃に定められたもので、民主党の優位なロチェスター市を二つに分断し、それぞれを共和党の優勢な郡部とくっつけて共和党優位の選挙区を作る戦略を示している。分断のしかたは、ロチェスター市の中央を南北に流れるジェネシー川に沿って市を東西に分けるやり方である。ジェネシー川の

図2 1980年以前の選挙区画



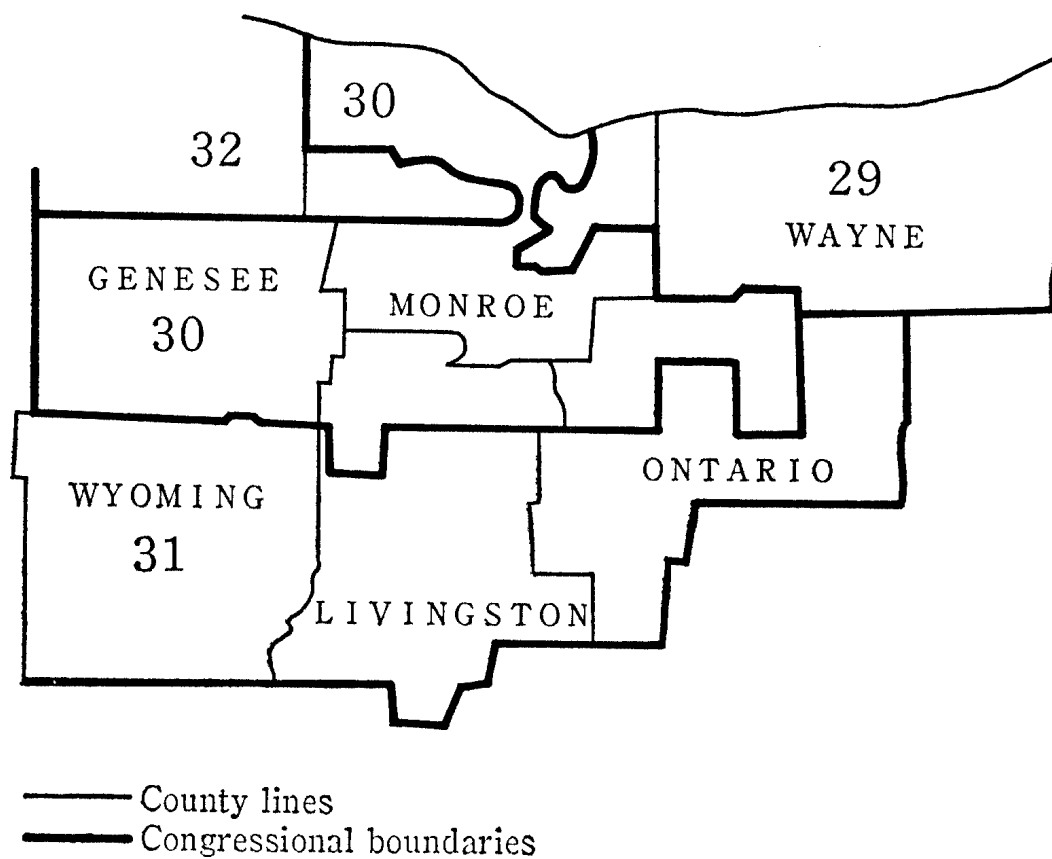
論
説

東のロチェスター市とウェイン郡などより成る第三四選挙区からは共和党のフランク・ホートンが、そしてジェネシー川の西のロチェスター市とジェネシー郡などより成る第三五選挙区からやはり共和党のバーバー・コナブルが連続して選ばれていた。

図3は一九八二年以降の選挙区画であるが、大幅な再編成となっている。その結果、ホートンの選挙区は第二九選挙区、コナブルの選挙区は第三〇選挙区となった。第三〇選挙区は折衝の末このような形状となったが、政党の勢力にも微妙な変化が生じた。以前の第三五選挙区と比較すると、郡部が減っており、その結果、都市部つまりロチェスター市の比重が増加している。そのことは民主党にいくぶん有利になったことを意味した。(21) もちろん、表1が示すように、全体として第三〇選挙区が共和党優位であることは保持された。現職議員コナブルの出身地、ジェネシー郡はそのまま新しい選挙区に含められた。コナブルは一九八二年選挙でも大差で再選された。

図3 1982年以降の選挙区画

小選挙区制と議員活動について



第二九選挙区ではやはりホートンが再選された。⁽²⁾
 このときの選挙区画再編成は、結果的に共和党現職の基盤をゆるがすにはいたらなかった。

さて、選挙区画再編成後の一九八二年選挙でも大勝したコナブルは、一九八四年二月突然に引退を表明した。一九六四年初当選以来、連続十期当選し、下院歳入委員会の有力議員として活躍し、かつまた地元のためにもよく働いたコナブルの人気は高く、十一回目の当選は確実とみられていただけに、彼の突然の引退は地元でもワシントンでも大きな衝撃を与えた。全国レベルの政治を志す人々にとってはまたとないチャンスを意味した。ホートンとコナブルにより二〇年間も下院の議席が占められ、新人台頭の機会がなかったが、ようやくその機会がめぐってきたのである。また、民主党は共和党大物議員の引退で議席奪取の機会が来たとみなした。

他方、共和党は人気の高いレーガン大統領再選の年であり、連邦議会では長年の民主党優位を打破して共和党支配の議会をめざしており、共和党優位の第三〇選挙区では当然議席を維持しなければならなかった。

一九八四年選挙に始まり、つづいて八六年、八八年と第三〇選挙区では激しい選挙戦がくりひろげられた。一連の選挙はだれがコナブルの選挙区を引き継ぐかの戦いといえた。一九八四年には共和党はレーガンの忠実な支持者エッカート、民主党はジェネシー郡保安官コールをたてて戦い、エッカートが勝利した。八六年には、現職エッカートに対し、民主党は切り札ともいべき女性候補のスローターをたてて議席奪取に成功する。八八年には、雪辱を期す共和党が若手郡議会議員のブチャードを擁立してスローターに挑戦するが、スローターは議席保持に成功する。コナブル圧勝の続いたそれ以前の選挙に比し、これら三回の選挙はいずれも激しい戦いが展開された。そこではさまざまな要因が働いたが、ことに選挙区要因と政党要因が大きく、それらがアメリカの議会選挙で実際にどのように作用するかを知るうえで興味深い事例となっている。以下において、選挙区要因と政党要因という視点からこれら三回の選挙の模様を検討していく。

(二) 一九八四年選挙

コナブルの引退表明後、さまざまな人の名前が候補者として民主・共和両党とも取りざたされたが、最終的には民主党はダグラス・コール、共和党はフレッド・エッカートが立候補した。⁽²³⁾ 共和党のエッカートはニューヨーク大学卒業後、一時ビジネスに従事していたが、早くより政治を志し、若冠二九才で地元グリース町の町長に当選(同じ共和党の現職を破る)、つづく州上院議員在任中にレーガン大統領によりフィジー諸島大使に起用され

るという経歴をもつ。熱烈なレーガン支持者として知られ、一九七六年にニューヨーク州からの党大会代議員に選出されたさいにレーガン擁立運動で活躍した。彼は全国レベルの政治家をめざしており、大使職はその重要なステップであった。

エックカートは任地でコナブルの引退表明を知るや、直ちに立候補を決意し、地元の後援者にその旨を伝えた。一九八四年は支持するレーガン大統領再選の年であり、彼にとっては絶好の機会であった。地元では州下院議員のピニー・クッキイとか彼の後任のグリース町長のドン・ライリーらが出馬の動きをみせていた。しかし、若くて有能で、政治経歴の豊富な、そしてなによりレーガンの支援を受けたエックカートには地元の共和党幹部や連邦議会共和党議員の支援が集まり、党員集会で他を圧倒して候補者に出された。

他方、民主党陣営では議席獲得の絶好の機会として、当初、モンロー郡議会議員とかロチェスター市会議員などから数名の立候補が予想された。しかし、共和党がエックカートを立てるとなると、彼に対抗しうる候補者を選ばなければなくなる。そうした情勢の中で、有力候補者として州下院議員ルイズ・スローターの名が早くより浮上していた。

スローターはケンタッキー州に生まれ、ケンタッキー大学で公衆衛生学を修めたのち、プロクター・アンド・ギャンブル社勤務中に現在の夫君と知り合い結婚し、そして夫君の勤務先コダック社のあるロチェスターに移ってきた。いまだ南部なまりの残るいわば「よそ者」であった。しかも一九二九年生まれの彼女は、一九八四年当時五十五才に達しており、国政をめざす新人候補としてけっして若いとはいえなかった。なぜ彼女が有力候補とみなされるようになったのか。

小選挙区制と議員活動について

彼女は結婚後しばらくの専業主婦生活を経て、子供に手のかからなくなった一九七〇年代初め頃より環境問題、とりわけ水質汚染問題に取り組み、それを契機に政治活動に関与するようになった。まず、モンロー郡民主党委員会委員に就任、一九七五年には現職共和党候補を破ってモンロー郡議会議員に当選、そして八二年にはまたも現職共和党候補を破って州下院議員に当選した。このようにして市民運動から出発し、郡から州への政治家としてのステップを登っていった彼女は、環境問題、消費者保護、青少年問題に意欲的に取り組むリベラルな政治家というイメージを確立していた。加えて、彼女には郡レベルを越えた州や連邦レベルでの支援を期待することができた。郡議会議員当時、彼女はニューヨーク州の州務長官から副知事になり、知事の座をめざしていたマリオ・クオモの選挙運動を手伝い、クオモ知事実現に貢献した。その一九八二年選挙では彼女自身州下院議員選挙に立候補し、現職共和党候補に挑戦する立場にあったが、クオモの運動に並々ならぬ尽力をした。⁽²⁴⁾ ニューヨーク市出身のクオモにとって西北部ではなじみがなく、スローターの貢献は大きかった。彼女は州下院議員時代からクオモのバックアップにより、州民主党のみならず連邦レベルの民主党政政治家たちにもその存在を認められていた。⁽²⁵⁾

しかし、一九八四年選挙ではスローターは結局立候補しなかった。彼女は一九八二年選挙では州下院に当選したばかりの一年生議員であり、州議会民主党議員団はせっかく奪取した議席を失うことを恐れた。州民主党指導者の一人で州下院議長のスランリー・フィンクは彼女の立候補に反対する意思を伝えた。こうした同僚議員の反対に加えて、スローター自身も共和党優勢なこの選挙区で、しかもレーガン人気を背景にするエックハートに勝てるかどうか不安が残った。熟慮の末、彼女は六月になり、立候補断念を表明した。

スローターの立候補断念後、第三〇選挙区の民主党候補として浮上したのがジェネシー郡保安官ダグラス・コ

ールであった。コールはジェネシー郡の旧家の出身で、祖父、父、兄弟とも共和党支持で、コール自身も共和党活動家であった。彼はヴァージニア大学卒業後、故郷に戻り、弁護士を開業していたが、しだいに政治家への意欲をもつようになった。彼はまず改選期を迎えていた郡保安官選挙をめざし、共和党から立候補しようとした。しかし、現職の共和党保安官は再選をめざしており、しかも郡共和党委員会も現職支持の態度をくずさなかった。共和党からの立候補は困難と知ったコールは思い切って郡民主党に支持を求めた。共和党が圧倒的に優位なジェネシー郡において、民主党は近づく郡保安官選挙への態勢が整わず苦慮していた矢先であり、コールの呼び掛けは好都合であった。こうしてもともと共和党であったコールが民主党候補として郡保安官選挙に立候補した。郡内での彼の個人的つながりに加えて民主党の支持もあり、コールは保安官選挙で勝利をかちえた。彼は郡保安官時代酔っ払い運転の防止などに手腕を振るい、人気を集めていた。

穏健な保守であるコールは同じジェネシー郡出身のコナブルの政治的立場に近く、コナブルの後継者として認知されることが期待された。こうしてエックカートに対抗する候補者として民主党はコールの擁立を決定した。民主党候補の座を得たとはいえ、コールには克服しなければならない大きな課題があった。彼はジェネシー郡でこそ知名度が高いものの、大栗田のモンロー郡や他の郡ではほとんど知られていなかった。まず、知名度を高め、人柄や政策をPRしなければならない。とくに、エックカートに比べ、選挙態勢づくりが遅れたコールにとって知名度を高めることは最優先の課題であった。知名度を高めるために最も効果的な手段はテレビのコマーシャルである。しかし、これには巨額の費用が必要である。

コールはまず選挙資金の調達をめざさなければならなかった。選挙資金は通常夕食会やカクテルパーティなど小選挙区制と議員活動について

の収入と献金によって調達される。そして献金には個人献金とPACからの献金がある。コールはこうした資金調達にさいして困難に直面した。パーティについては、彼の出身地ジェネシー郡のような小さな郡では大規模なパーティを開催しにくく、なんといっても大企業の多いロチェスター市で開催しなければ十分な収入は得られない。この点でモンロー郡になじみがうすく、しかももともと共和党であったコールは不利であった。また、すでに述べたように、PAC献金の重要性が増大しているが、有力企業や団体のPACはワシントンに本部を置いて活動している。それゆえ、有力なPACからの献金を得るには、ワシントンの政界とのつながりが大切になる。この点でもコールは困難に直面した。彼にはワシントンにおける民主党有力政治家とのつながりがまったく欠けていたからである。このことを自覚していたコールは民主党候補決定後早々にワシントンに行き、民主党全国委員会や連邦下院民主党議員団をまわり援助を要請した。だが、反応は芳しくなかった。ワシントンの政界は第三〇選挙区は共和党の強い選挙区であり、勝算がうすいとみなしていた。加えて、コールを弱い候補と評価していた。結局、コールの努力にもかかわらず、約十一万ドルを集めるにとどまった。これはエックカートが集めた約二万四千ドルの半分以下でしかなかった。

選挙態勢の遅れや資金調達の失敗はコールの運動に最後まで影響した。これに対して、エックカートは折からのレーガンブームにも乗って有利に選挙戦を進めた。彼は自分をレーガン路線の忠実な信奉者と盛んにPRした。十月下旬、地元紙『デモクラット・アンド・クロニクル』は恒例の候補者推薦を発表し、第三〇選挙区ではエックカートを推薦した。同紙は「この選挙区で選挙民には二人のきわだって異なる候補者の選択が与えられている。エックカートは強烈な保守で舌鋒鋭く、頭の回転も早く、そして不人気な決定を恐れない。他方、コールは政策的

表2 ニューヨーク州第30連邦下院選挙区1984年選挙結果

地 域	コール(民主党)	エックカート(共和 党・保守党推薦)
ロチェスター市(一部)	16,536	13,122
モンロー郡 (ロチェスター市除く)	60,070	81,234
ジェネシー郡	13,120	10,753
リビングストン郡	2,832	4,507
オンタリオ郡	4,200	7,649
合 計	96,758	117,265

小選挙区制と議員活動について

にリベラルで、行動スタイルも穏健である。われわれはMXミサイルの生産、妊娠中絶問題、学校での礼拝などについてエックカートと見解を異にする。しかし、問題解決者としての彼の能力に期待する。コールは有能で、保安官としてよく働いた。しかし、彼は政治的仲介者以上の印象を与えない」とした。⁽²⁶⁾

結局、コールの奮闘も空しく、選挙はエックカートの勝利に終わった。それは予想通りといえたが、しかし、その内容はエックカートおよび共和党陣営にとって不満の残るものであった。コールとの票差は二万票にすぎなかった。これまでコナブルの圧勝をみなれてきた共和党陣営には、コールの善戦が目についた選挙であった。ちなみに一九八二年選挙でコナブルは総投票数の六十八%、約十二万票を獲得し、挑戦者の民主党ベネットの約五万票に七万票の大差をつけている。これに比べると、一九八四年のエックカートの勝利は危ういものであった。とりわけ、コールのような弱い候補に大差をつけることができなかったことは、エックカートの不安定さを示すものと受けとられた。なお、この年スローターは州下院選で再選された。

(三) 一九八六年選挙

一九八四年選挙では敗北したものの、コナブルとは異なりエックカートが相手ならば民主党にも十分勝利の可能性があることを示していた。前回、立候

補を見送ったスローターは一九八六年早々に立候補を表明した。モンロー郡民主党の幹部たちは直ちに支持を表明した。州下院の民主党議員団は今回は反対しなかった。前回、反対の意思を伝えたフィंक下院議長は政界引退を表明していた。民主党全国委員会ならびに連邦下院民主党議員団は、第三〇選挙区は勝利の機会のある選挙区、とくにスローターならば勝てる選挙区と認め、重点選挙区に指定した。このようなスローターおよび郡、州そして連邦レベルの民主党の動きを見て、当初、再出馬の意思を持っていたコールも出馬しないと表明し、スローターに協力を約束した。⁽²⁷⁾

ただ、モンロー郡民主党の一部にはごく少数ではあるがスローターの立候補に反対する動きもあった。モンロー郡議会議員ウィリアム・バスタクはスローターはリベラルであり、保守色の濃いこの選挙区の代表としてふさわしくないと批判し、出馬の動きをみせた。驚いたモンロー郡民主党幹部はバスタクに立候補をとりやめるように勧告した。しかし、バスタクは受け入れず、結局、予備選挙が実施された。スローターは予備選挙で圧倒的にバスタクを破り、民主党の候補に選ばれた。バスタクの動きは多くの民主党支持者には愚かしいことと受けとられ、むしろ、スローターの方に結集する結果となった。

このようにしてスローターは民主党組織をあげての支援を得ることができた。党全国委員会や連邦下院民主党議員団選挙対策委員会の紹介などもあって、多くの有力労働組合のPACから新人候補としては異例なほどの選挙資金が寄せられた。また、女性候補ということで、全国規模の女性団体からも次々と献金が寄せられた。クオモ知事を始め、エドワード・ケネディ、ダニエル・モイニハン、ビル・ブラッドレーら有力上院議員も資金集めの夕食会に協力してくれた。連邦レベルの選挙での資金集めの夕食会はチケットが二〇〇ドル程度であり、これ

を大量に売ることとは簡単なことではない。とくに、知名度の高くない新人候補が夕食会を成功させるためには、有力政治家の支援とか出席が不可欠である。スローターはこの点でも恵まれていた。

選挙資金とらんでボランティア活動家をどの程度集めるかも活発な選挙運動を展開するための鍵となる。第三〇選挙区を構成する各郡組織を通じて最終的には二〇〇〇人のボランティアが集まった。とくに中心となるモンロー郡民主党組織の動きが活発であった。モンロー郡民主党の若手リーダー、フラン・ワイズバーグが専任の選挙事務長としてスローターの運動を取り仕切った。このようにして、スローター陣営は組織、資金、人員のいずれにおいても充実し、活発な運動を展開した。スローター自身は州下院議員としての自分の実績をアピールするとともに、現職連邦下院議員のエックカートは選挙区のために十分な働きをしていない、自分こそ選挙区のために働くことを訴えた。社会福祉団体、環境保護団体、消費者連盟、看護婦会などから次々とスローターへの推薦が寄せられた。

スローターの活発な動きに対して、エックカートは危機感を持ち、再選運動を開始した。彼の場合、建設業、タバコ会社、銀行、保険会社、石油会社、自動車販売会社などのPACから資金が集まり、主に経済界の支援を受けていた。それでもエックカートの集めた額は五六万四六四ドルでスローターの集めた五八万二〇五九ドルには及ばなかった。この年の連邦下院選挙全候補者の平均額が二六万三二二ドルであるから、両者とも平均の二倍以上の資金を集めており、激しい選挙戦であったことは資金の面からもうかがえる。

エックカートは選挙戦の中でスローターの非難は誤りであり、自分の議員としての実績を過小評価していると切りかえた。彼はレーガン路線の忠実な信奉者としてレーガン大統領の業績、とりわけレーガノミクスと外交面

小選挙区制と議員活動について

での成果を讃えた。レーガン外交は強いアメリカの復活とアメリカの威信の増大をもたらしたと訴え、エッカート自身かつてフィジー諸島大使としてレーガン外交の一翼を担ったと強調した。彼はレーガン人気を背景に全国レベルの政治での彼の貢献を力説したのであった。

両候補の激突で選挙戦はかってないほど盛り上がった。一〇月一五日のテレビ討論において、多くの争点で両者の相違が前面に出て、激しい批判の応酬が行われた。男女平等法、妊娠中絶、政府介入、銃規制などで両者はことごとく対立した。保守のエッカートはこれらに反対し、リベラルなスローターは賛成の立場をとった。つづく一〇月二七日のテレビ討論でもスローターは軍備の拡充よりも水質汚染防止や環境保護の充実を主張したのに対し、エッカートは財政支出削減を唱え、スローターが赤字増大に味方していると批判した。同時に彼は軍備の充実が欠くべからざるもので、現在はカーター政権時代よりも格段によくなっているととし、カーター政権を批判するとともに、八〇年大統領選挙でカーターを支援していたスローターを批判した。⁽²⁸⁾

選挙戦が進むにつれて、しかし、エッカートには不利な事実がいくつか明らかにされた。ことに社会福祉面での彼の働きが不十分であるとされた。社会福祉・医療保護全国委員会は連邦議会での各議員の社会福祉面での活動ぶりを取り上げて評価し、それを発表した。下院議員の平均点が七三点、そして隣りの第二九選挙区の同じ共和党のホートンが一〇〇点を得たのに対し、エッカートはきわだって低く、わずか四〇点と評価された。⁽²⁹⁾ エッカートはまきかえしをねらって、「スローターが州下院議員として社会保障の充実に貢献したというのはウソだ。社会保障は連邦政府の仕事であり、州下院議員の彼女が尽力したというのは間違っている」とテレビコマーシャルを使って宣伝した。これに対して、民間団体である公正選挙委員会はエッカートのコマーシャルは正しくない

と指摘し、「確かに社会保障は連邦政府の仕事だが、スローターがその充実のために運動してきたことはよく知られている」と発表した。⁽³⁰⁾

終盤にいたり、エックカートを支援する人たちをさらに失望させる事実が明らかになった。スローターのテレビコマーシャルにペギー・セイという中年女性が登場し、「自分の弟、テリー・アンダーソンはAP通信のベイルート支社長だが、アラブ・ゲリラに誘拐され、人質になっている。自分はエックカート下院議員の事務所に行き、弟の解放のために力になってほしいと頼んだ。ところが、エックカート下院議員は、現在、レーガン大統領は静観するという態度をとっていると述べ、結局、なにもしてくれなかった」と非難し、選挙ではスローターを支持すると語った。ペギー・セイの発言は地元紙に大々的に報道された。エックカートは懸命に弁明し、セイ夫人には手紙を書き、彼女の弟の釈放のために舞台裏で努力していると語ったが、説得力に乏しかった。セイは地元紙のインタービューで「スローター候補の方が頼りになると感じる」と答え、また、スローター自身も「私が議員だったら、彼女にこんな思いをさせなかった」と述べた。ペギー・セイの非難はエックカートは選挙民のために働かない政治家というイメージを大方の人々に与えた。⁽³¹⁾

選挙日の十日前、地元紙『デモクラット・アンド・クロニクル』は恒例の候補者推薦を発表し、第三〇選挙区ではスローターを推薦した。同紙は「エックカートは下院議員としての二年間、選挙民の声に耳を傾けなかった。彼は政府は人民のためにあるということをししばしば忘れた。レーガン路線に忠実なあまり社会福祉を後退させた。ロチェスター市にも大きなメリットのある都市再開発法案に反対すらした。エックカートは雄弁で達筆である。『ウォールストリート・ジャーナル』紙にもしばしば登場する。彼はソビエトの船員が海にとびこんで亡命した

表3 ニューヨーク州第30連邦下院選挙区1986年選挙結果

地 域	スローター (民主党)	エックカート(共和 党・保守党推薦)
ロチェスター市(一部)	13,989	7,907
モンロー郡 (ロチェスター市除く)	56,497	55,847
ジェネシー郡	7,535	9,605
リビングストン郡	2,507	3,203
オンタリオ郡	4,111	5,157
合 計	84,639	81,719

事件については熱心に書いたが、ペギー・セイについてはなにも書かなかった。そしてなにもしなかった」と述べた。他方、スローターについては、「州下院議員としての二期四年間よく選挙民の声に耳を傾けた。彼女は必ずしも自分を支持しなかった人々のためにも力を尽くした。彼女は議員としての職務を行うのに必要なもの、頭脳、エネルギー、そして心をもっている」と評価した。なお、同紙は第二九選挙区についてはやはり地元のために尽くしているとして共和党現職のホートンを推薦した。⁽³²⁾

選挙ではエックカートは前回よりも三万票も減り、スローターに敗北した。これに共和党の強い郡部での減少が目立った。彼は共和党支持者を失望させたのだった。票差こそ僅差であったが、彼の戦いぶりは惨敗と評された。エックカートの敗因を地元夕刊紙『タイムズユニオン』は次のように分析した。「エックカートは現職議員としての有利を生かさなかった。現職議員には郵送料無料の特典があり、議員は大量のメールを選挙民に郵送する。ところが、エックカートはそれがきわだって少なかった。選挙資金の面でも遅れをとった。彼は一生懸命の努力をしなかった。専任の資金担当者を選挙運動スタッフに長らく置かなかった。エックカートは選挙民の中に入っていこうとしなかった。彼のために働く選挙運動のボランティアたちに対しても冷ややかであった。また、政策的にもスローターの批判に対して受身で、積極的に自己の貢献をアピールしなかった」と指摘し、「結局、エックカートは下院議員の職務に献

身したのか、そして議席を守るために懸命の努力をしたのか疑問視せざるをえない」と論じた。⁽³³⁾

この年、再選を求めた現職下院議員三九三人のうち、落選したのはわずか六人にすぎなかった。そのうちの一人がエッカートであった。彼の再起のチャンスはもはやないとみなされた。選挙後、エッカートはレーガン政権によって再び大使に起用され、選挙区を去った。

(四) 一九八八年選挙

このようにして長らく共和党の指定席、そしてコナブルの選挙区といわれた第三〇選挙区で民主党新人のスローターが勝利した。見事な勝利であった。だが、獲得した議席は確保しなければならない。二年後の選挙に備えなければならない。エッカートの失敗をくりかえさないために、選挙を念頭においた活動がなされた。彼女の議員活動、とくに地元のための活動は詳細に選挙民に報告された。彼女は公共事業・運輸常任委員会に所属したが、これは地元サービスには都合のよい委員会である。新人ながらこのような人気のある委員会に所属できたのは、下院民主党議員団の配慮であった。また、下院民主党議員団は新人ながらも彼女を院内幹事団の一員に選任した。そこで彼女はリチャード・ゲッパートら有力議員と議会活動をする機会に恵まれる。当選後、彼女はワシントンでの生活を始めたが、ほとんど毎週末にはロチェスターに戻り、地元との接触に努めた。

一九八八年、選挙の年が明けるや、スローターは再選活動を開始した。⁽³⁴⁾ ワシントンの世論調査会社（ポルスタ）に依頼して、第三〇選挙区内で一月から六月にかけて四回にわたり、サーベイ調査を実施した。約五〇〇人の有権者に「なにが争点なのか」とか「どのような候補者を望むのか」などが質問され、その結果が分析された。

小選挙区制と議員活動について

五月には選挙実務スタッフがそろい、再選委員会が発足し、運動を開始した。今回は、三月までゲッパート下院議員の大統領予備選挙運動に携わっていたスタッフが数人加わった。六月にはすでに地元テレビ局でモンロー郡空港拡張のための連邦補助金獲得、ジェネシー郡での学童用歩行者トンネル建設ならびに高速道路整備に果たした彼女の貢献を宣伝するコマーシャルが流された。そして、今回は民主党内で彼女に対抗して候補に名乗りをあげるものではなく、予備選挙は行われなかった。

他方、共和党は長年保持してきた議席を失い、大きなショックを受けた。直ちに敗因が検討され、エックカートに代わる候補者の選定が開始された。第三〇選挙区共和党候補の選定は、モンロー、ジェネシー、リビングストン、オントリオ各郡共和党委員会代表が集まって行われた。この選定委員会の構成は各郡の人口の割合に従って十二人の委員中、モンロー郡から九人、他三郡から一人ずつ選出した。当初、ジェネシー郡共和党は同郡議会議長クレイグ・ヤンカーを推した。ヤンカーは三十八才の若手ながら郡議会議員としての実績を積み、また、全国党大会への州代議員として活動した経験もあった。この提案にリビングストン、オントリオ郡共和党は賛成した。しかし、モンロー郡共和党は候補者はモンロー郡から出したいとし、ヤンカーに難色を示した。モンロー郡側は同郡議会議員ジョン・ブチャード（三十三才）を推し、数の力でやや強引に押しきった。他三郡共和党は決定を受け入れて協力することを約束したが、選考過程に不満が残った。

ブチャードはシラキューズ大学出身の弁護士でモンロー郡共和党の若手のホープと目されていた。ロチェスターで生まれ育ったが、早く両親を亡くし、苦勞してロースクールを卒業したブチャードは、穏健な保守主義の立場をとり、自分こそコナブルの後継者だとPRした。しかし、ブチャードには経験不足と実績の欠如という批判

がつきまとった。彼の公職経験は、一九八五年に初当選した任期途中のモンロー郡議会議員としての二年間あまりにすぎない。この間、彼は議員として顕著な実績をあげたというわけでもなかった。また、候補者選考過程で他郡共和党との不協和音も残っていた。⁽³⁵⁾

加えて、ブチャードには保守党のトーマス・クックの出馬が誤算であった。保守党はニューヨーク州だけの組織という小政党であるが、第三〇選挙区では五千から一万票程度の集票力をもち、あなどりがたい勢力なのである。とくに、接戦になった場合、その帰趨は決定的となりうる。保守党はローカルな選挙では独自候補をたてることが、連邦レベルの選挙では候補者を擁立せず、政策的に近い共和党候補を推薦することが多い。ちなみに、一九八四年と八六年選挙では保守党は共和党のエックカーを推薦していた。ブチャードは当然保守党の推薦を求めた。これに対して、モンロー郡保守党委員長のクックはブチャードは真の保守ではないと批判し、自らの立候補を宣言した。

こうした誤算にもめげず、ブチャードは果敢に現職のスローターに挑戦した。彼は数種類のコマーシャルを制作し、選挙戦が本格化してから頻繁に流した。その主なものをあげると、ひとつは夫人と二人の子供と共に公園を散歩しているもので妻子を愛し、家庭を大切にする人物というイメージを強調したものだ。二つ目はレーガン大統領とホワイトハウスで談笑しているシーン、そしてレーガン大統領の推薦スピーチをおりこんだもので人気の高いレーガン大統領の支持をアピールしていた。三つ目はスローター批判に徹しており、スローターは労働組合のロボットであり、増税論者であり、そしてデューカキスタイプのリベラルだとどぎつく攻撃したものだ。た。

候補者同士が直接対決するテレビ討論でもブチャードは挑戦者らしくスローター批判を徹底的にくりかえした。まず、議会活動では彼女は保護主義法案に賛成投票した。これは輸出依存型産業の多いロチェスターの将来を危うくする行動であると批判した。さらに、彼はスローターはデューカスタイプのリベラルで犯罪に対して弱腰であり、増税論者であり、加えて国防にも消極的だと攻撃した。つづいてスローターの選挙運動を批判し、労働組合のPACから多額の献金を受けており、労働組合の利益の代弁者となっていると非難した。そしてちょうど共和党の先輩コナブルがそうであったように、自分こそ本当に選挙区のためになる仕事をする⁽³⁶⁾と主張した。

これに対して、テレビ討論においてスローターは下院議員としての二年間にいかに地元のために働いたかをさかんにアピールした。そして郡議会議員以来十四年間の公職生活で一貫して選挙民のために活動してきたことを強調した。彼女は空港拡張への貢献などの実績を述べるとともに、自分がもっとも誇りに思うことは人々のために尽くすことができたこと⁽³⁷⁾とし、次のエピソードを語った。「ある金曜日の午後、ひとりの選挙民から事務所に電話があり、父がスコットランドで急に亡くなった。急いでスコットランドに行かねばならず、パスポートの申請に郡役所に行った。しかし、担当者は『いまは金曜日の午後だ。月曜日は休日だから、火曜日の朝来たら渡せる』⁽³⁷⁾といった。それでは遅すぎる。なんとかしてほしいということだった。そこで自分はスタッフとともに奔走し、翌土曜日の朝にパスポートをその選挙民に渡すことができた」というものだった。前回、現職のエッカートが選挙民のために働かない議員とされ、落選したことを教訓とし、いかに選挙民のために貢献したか巧みにアピールしたものだ⁽³⁷⁾。スローターには現職としての自信と余裕すらうかがえた。彼女はブチャードの批判はバカげていると否定し、むしろ彼の批判は彼自身の認識不足や経験の欠如を物語っているとし、さらにブチャード

表4 ニューヨーク州第30連邦下院選挙区1988年選挙結果

地 域	スローター (民主党)	ブチャード (共和党)	クック (保守党)
ロチェスター市(一部)	18,793	7,959	688
モンロー郡 (ロチェスター市除く)	79,920	58,440	4,027
ジェネシー郡	6,525	4,764	328
リビングストン郡	3,887	3,390	252
オンタリオ郡	7,140	5,535	344
合 計	116,265	80,088	5,639

小選挙区制と議員活動について

のこれまでの活動にはみるべきものがないと批判した。

第三の候補者クックは、スローターとブチャード両者を批判した。彼は「小さな政府」、「政府介入反対」、「個人の自由」を基本主張とし、スローターのようなりべラルは大きな政府論者であり、ブチャードは政府介入反対の姿勢が徹底していないと非難した。彼はスローターとブチャードとともに攻撃したが、その攻撃はむしろブチャードをより傷つけ、スローターにはかえって有利な結果となった。保守的な中流白人層から大量に得票したいブチャードにとって、クックの批判はいわば同士打ちに近いものであった。現職を追いつめなければならぬブチャードにとって、クックの攻撃は氣勢をそぐものであった。

選挙戦はスローターに有利に展開した。今回は彼女が現職としての強みもあり、しかも議席維持をめざす民主党組織あげての支援を再度得ることができた。早くより資金集めの努力の結果、最終的に八〇万ドルを超える選挙資金を獲得した。これは前回の五八万ドルを大幅に上回り、額において下院議員中のトップクラスに位置していた。ちなみに、八八年選挙で現職下院議員の平均額は約三八万ドルで、その二倍以上にも達し、もちろん対立候補ブチャードの約三〇万ドルを圧倒していた。

一〇月末、地元紙『デモクラット・アンド・クロニクル』は今回もスローター

ーを推薦した。同紙は「スローターほど活躍した新人議員はいない」と述べ、二年間の彼女の議員活動を高く評価した。ブチャードについては、「有望で熱心に運動したが、彼のスローター批判は正しくない。彼女は労働組合のロボットではなく、特定利益団体のためにのみ働いてきたわけでもない。ブチャードはスローターをリベラルだと攻撃したが、彼自身の政策はスローターと多くの点で異なっていない。彼のスローター非難は的はずれだ」とし、政治家としての成熟度に欠けると述べた。⁽³⁸⁾なお、同紙は第二九選挙区では今回もホートンを推薦した。

選挙結果は現職スローターの勝利に終わった。彼女は民主党の弱い郡部でもブチャードをリードし、すべての市、町、村でも上まわる圧倒的勝利をおさめた。

四 むすびにかえて

すでに見てきたように、第三〇選挙区では一九八四、八六、八八年の三回の選挙で激しい戦いがくりひろげられた。この間、隣りの第二九選挙区ではベテランのホートンが圧倒的な強みを発揮して当選を続けている。第三〇選挙区では強力な現職の引退をうけてだが後継者となるかをめぐる戦いが一連の選挙で展開されたといえる。そこでは政党要因と選挙区要因とがどのように作用したのであるか。

まず、一九八六年におけるスローターの当選と現職エッカートの落選にみられるように、ここでは選挙区要因が大きく作用していることは確かである。全国レベルではなく選挙区の利益とか選挙民へのサービスが重要になってきているのである。では、政党要因はどうであらうか。政党勢力は登録支持者数により明示される。近年、

無党派層が増加しているとはいえ、自らを民主党あるいは共和党支持者と登録する人が七〇%程度も存在している。⁽³⁹⁾さらに、その政党支持に従って投票する、つまりパーティライン投票が一九八八年の議会選挙では依然七四

%⁽⁴⁰⁾(全国調査)にも達している。実際に、ニューヨーク州西北部は全体として共和党が強い地域であり、第二九

選挙区からは共和党のホートンが一九六二年以来連続して選出されている。第三〇選挙区も一九八二年まではコナブルを十回連続で選出し、一九八四年にはエックカートを選出した。いずれも共和党である。第三一選挙区では一九八六年までやはり共和党のジャック・ケンプを、八八年には出馬を取り止めたケンプに代わり同じ共和党のビル・パクソンを選出してきている。政党要因も依然根強いという見方もできる。

ところが、共和党の指定席ともいえるこれらの選挙区の中で第三〇選挙区では一九八六年に現職共和党候補を民主党新人が破るという事態が起きた。一九八八年には民主党は議席維持に成功した。どうしてこのような事態になったのかを政党要因と選挙区要因の視点から考察すると次のように説明できよう。

(1) 一九八〇年の選挙区再編成で民主党がいくぶん有利になったことがあげられる。この再編成で民主党の強いロチェスター市の完全な分断が崩れ、第三〇選挙区は都市部が増えて郡部が減った。

(2) 穏健な保守でベテランのコナブルの引退後、共和党により候補者が出なかったことがあげられよう。エックカートはコナブルの後継者にはなれなかった。

(3) エックカートは選挙戦でレーガン路線の成果を強調し、その面での自己の貢献を専らPRしたが、彼の地元活動は評価されなかった。

(4) 他方、スローターは地元や選挙民のために働く政治家というイメージを徹底させた。

小選挙区制と議員活動について

(5) スローターには郡レベルのみならず州・連邦レベルの民主党の一致した支援があった。

つまり、いかに政党の強い勢力基盤があっても弱い候補者では勝てないということであり、そのような候補者に対しては政党の勢力基盤がやや弱くても強い候補者をたてることができる。強い候補者とは選挙民との間に強い結びつきを作ることができる候補者であり、そのためには地元や選挙民のために働く政治家というイメージを確立しなければならない。スローターはそのイメージの確立に成功した。一九八八年選挙では、弱い候補者（ブチャード）と共和党選挙態勢の不十分さ（モンロー郡共和党と他三郡共和党の間の対立）もあり、現職の有利も加わってスローターは圧勝した。

一九八四年選挙はエッカートもコールも上述の意味では強い候補者とはいえなかった。ベテラン現職の突然の引退の直後の選挙であり、両者とも新人で選挙民になじみは薄かった。この選挙ではむしろ政党要因や全国的政治情勢が影響したといえる。共和党の強い選挙区でしかも人気の高いレーガン大統領再選の年でもあり、エッカートには有利な条件が整っていた。他方、コールは民主党組織の支援を十分に受けることができなかった。

最初に述べたように、アメリカの議会選挙においてパーソナルポットとか選挙区要因が強まっていることは本稿で事例として取り上げた第三〇選挙区の一連の選挙からも明らかである。ことにスローターの初当選と議席保持はそれを例証する。ゆえに、アメリカの議員たちが選挙に勝つために、地元利益や選挙民へのサービスを重視する活動を行うというケイン、フェアジョン、フィオリナの指摘はこの選挙区の場合もあてはまる。小選挙区制のもとで必ずしも政党本位の選挙にはならないことを示すものである。

しかし、政党の重要性がなくなったわけではない。確かに、もはや政党要因だけでは選挙に勝てなくなってい

る。共和党支持の選挙民が選挙ではいつも自動的に共和党候補者に投票するということはありえない。けれども政党は依然として選挙において大きな役割を果たしており、また果たしうるものである。それはどこであろうか。本稿の事例でみたように、候補者の選定、選挙資金調達および選挙運動支援といった選挙の重要な局面で政党は大きな役割を果たしているのである。また、選挙区再編成についても政党間の交渉に負うところが大きい。筆者はアメリカの選挙において政党は選挙というゲームの枠組みとかルール作成の役割を果たしていると考える。アメリカ政党は選挙というゲームの主体になるのではなく、ゲームの環境、運営ルール、プレイヤー（候補者）の選出そしてプレイヤー（候補者）への支援において重要な役割を担っているのである。⁽⁴⁾

- (1) 日本の選挙制度については、坂上順夫『日本選挙制度論』（政治広報センター、一九七二年）、柚正夫『日本選挙制度史』（九大出版会一九八六年）、松尾尊允『普通選挙制度成立史の研究』（岩波書店、一九八九年）を参照。
- (2) Maurice Duverger, *Les Partis Politiques* (Librairie Armand Colin, 1961). 岡野加穂留訳『政党社会学』（潮出版社、一九七〇年）。
- (3) Richard Feno, Jr., *Home Style: House Members in Their Districts* (Little, Brown, 1978), pp. 31-33.
- (4) Bruce Cain, John Ferejohn, and Morris Fiorina, *The Personal Vote: Constituency Service and Electoral Independence* (Harvard University Press, 1987), pp. 9-12.
- (5) *Ibid.*, p. 12.
- (6) Norman Ornstein, Thomas Mann and Michael Malvin, *Vital Statistics on Congress 1989-1990* (American Enterprise Institute, 1990), p. 56.
- (7) Cain, Ferejohn, and Fiorina, *op. cit.*, pp. 12-15.
- (8) *Ibid.*, pp. 15-18.

(9) 例えば、ジェフリー・アーチャー『めざせダウンング街一〇番地』（新潮文庫、一九八五年）にその姿が描かれている。

(10) Cain, Ferejohn, and Fiorina, *op. cit.*, p. 6.

(11) *Ibid.*, p. 23.

(12) アメリカ政党の特徴についての古典的指摘として、E. E. Schattschneider, *Party Government* (Farrar and Rinehart, 1942), pp. 129-169 間登志夫訳『政党政治論』（法律文化社（一九六二年）一五三—二〇〇ページ参照。

(14) Paul S. Herrson, *Party Campaigning in the 1980s* (Harvard University Press, 1988) を参照。

(15) Ornstein, Mann and Malvin, *op. cit.*, pp. 71-72.

(16) 政治活動委員会 PAC について、Larry Sabato, *PAC Power* (W. W. Norton, 1984) 参照。

(17) Ornstein, Mann and Malvin, *op. cit.*, pp. 85-86.

(18) 議員が選挙区画再編成をいかに重大視しているかについては、Fenno, *op. cit.*, pp. 10-12 参照。

(19) アメリカ連邦下院の議席配分と選挙区再編成の制度と経緯については、渡辺重範編著『選挙と議席配分の制度』（成文堂、一九八九年）、四一—八七ページ参照。最近の再編成の実情については、東尾正「アメリカ合衆国における選挙区画再編成について」『選挙時報』二八巻四号（一九八九年四月）、一一—二〇ページ参照。

(20) この地域の政治的状况については、Linda L. Fowler and Robert D. McClure *Political Ambition: Who Decides to Run for Congress* (Yale University Press, 1989), pp. 25-49 を参照。

(21) *Ibid.*, pp. 54-65.

(22) ホートンの一九八四年、八六年、八八年選挙結果は次の通りである。

一九八四年選挙	ホートン（共和党）	一三八、三六二（七〇％）
	トゥール（民主党）	四八、三〇一（二四％）
一九八六年選挙	ホートン（共和党）	一三二、六〇八（六九％）

ボーゲル（民主党） 五一、二四三（二七％）
 一九八八年選挙 ホートン（共和党） 九九、七〇四（七一％）

ボーゲル（民主党） 三四、一九四（二四％）

(23) 一九八四年選挙については、Fowler and McClure, *op. cit.*, pp. 174-204 参照。

(24) *Democrat and Chronicle*, November 3, 1982.

(25) スローターは一九七六年大統領選挙ではユードルの予備選挙運動の第二九、第三〇選挙区責任者、八〇年大統領選挙ではカーターの選挙運動の第二九、第三〇選挙区責任者、八二年州知事選挙ではクオモの選挙運動の第二九、第三〇選挙区責任者をつとめた。

(26) *Democrat and Chronicle*, October 22, 1984.

(27) 一九八六年選挙については、Fowler and McClure, *op. cit.*, pp. 101-121 及び pp. 223-239 を参照。

(28) *Democrat and Chronicle*, October 28, 1986.

(29) *Democrat and Chronicle*, October 16, 1986.

(30) *Democrat and Chronicle*, October 22, 1986.

(31) *Democrat and Chronicle*, October 21, 1986.

(32) *Democrat and Chronicle*, October 24, 1986.

(33) *Times Union*, November 20, 1986.

(34) 一九八八年選挙については、筆者は在外研究期間として一九八八年四月より一年間ロチェスター市に滞在し、スローター議員を始め関係者とのインタビューを行った。詳しくは拙稿「アメリカの議会選挙―ある女性議員の選挙活動を中心に―」、関西学院大学アメリカ研究会編『アメリカの現状と展望』（啓文社、一九九〇年）所収を参照。

(35) *Democrat and Chronicle*, August 24, 1988.

(36) *Democrat and Chronicle*, October 21, 1988.

小選挙区制と議員活動について

(37) *Democrat and Chronicle*, October 21, 1988.

(38) *Democrat and Chronicle*, October 26, 1988.

(39) Harold Stanley and Richard Niemi, *Vital Statistics on American Politics* (Congressional Quarterly, 1988), pp. 124-126.

(40) Ornstein, Mann and Malvin, *op. cit.*, p. 65.

(41) 一九九〇年選挙において、現職スローターは、挑戦者、共和党の若手弁護士ジョン・リーガン・ジュニアに約三万票の差をつけて三選された。なお、得票数はスローター、九万六一四八票、リーガン、六万六九七二票であった。

〔付記〕 本稿は一九九〇年五月二〇日京都産業大学で開催された日本選挙学会での報告を修正・加筆したものである。報告の際、御意見と御助言をいただいたことを感謝いたします。